

日本ロレンス協会 第52回大会報告——2021年6月19日，20日

開催校として準備を進めていた高知県立大学での大会の実施が可能かどうか、昨年から模索してきましたが、コロナ禍の状況に鑑みて2021年度はオンラインでの開催となりました。昨年の大会のころはまだ普及しているとまではいえなかったZoomが遠隔授業の実施などをとおして多くの協会員のあいだにも広まり、今年はZoomによる同時遠隔開催となりました。2日間のプログラムをとおして協会外の方々を含む数多くの参加者があり、充実した大会となりました。

1日目は研究発表から始まりました。司会は糸多郁子氏です。



大江公樹氏（早稲田大学大学院生）は「*Lady Chatterley's Lover*」における「純粹」の探求」と題してロレンス最後の長編の読解を披露されました。

1日目の後半はシンポジウム「アフター・ロレンス——共通文化にむけて」です。



司会は井出達郎氏がつとめられました。

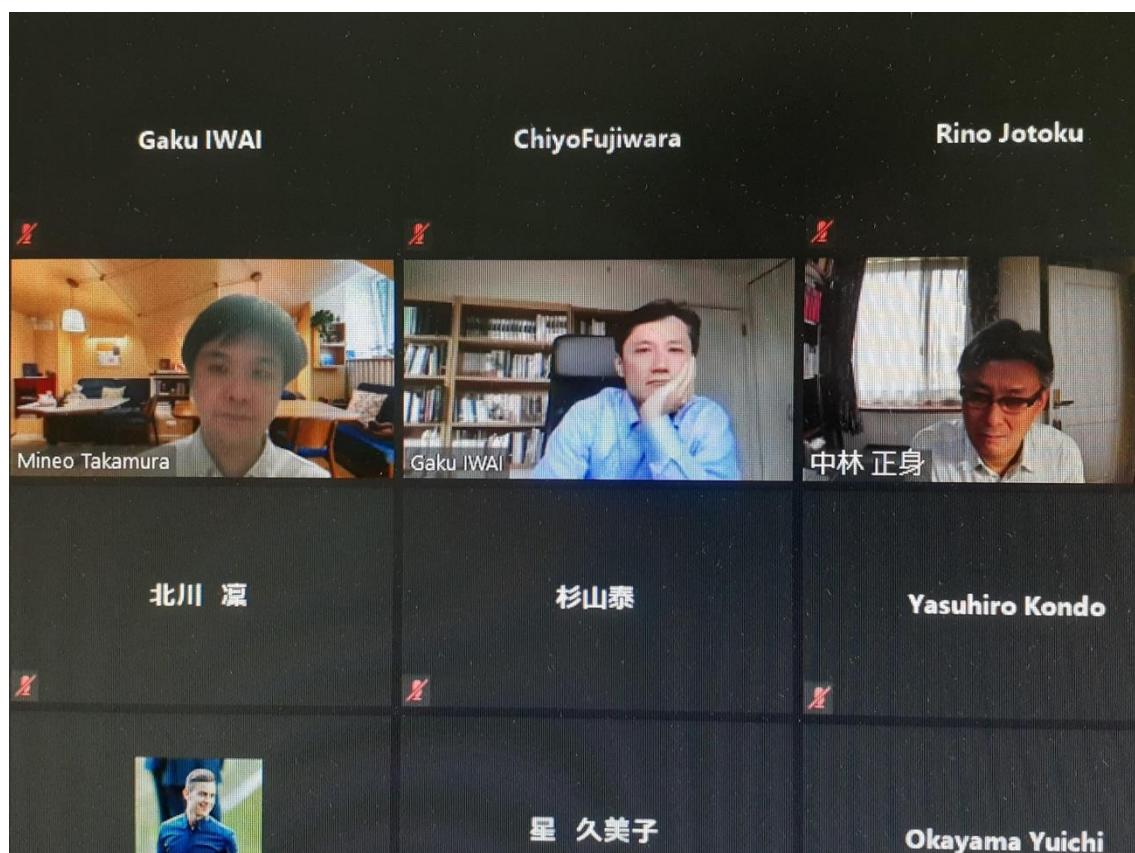
井出氏はアメリカの作家ヘンリー・ミラーの『北回帰線』の分析をとおしてロレンスからつながってゆく「共通文化」の興味深い一側面を示されました。

協会外から講師をつとめられた廣瀬絵美氏（日本女子大学大学院生）はイギリスの音楽民俗学者 A・L・ロイドの主導したフォークリヴィアイヴァル運動の紹介を通じて炭坑歌と「共通文化」というテーマを論じられました。

木下誠氏は 2019 年の著書『モダンムーヴメントの D・H・ロレンス——デザインの 20 世紀／帝国空間／共有するアート』における、作家晩年のエッセイのコンテクストの掘り下げを出発点に、ロレンス文学を「共通文化」の方へとひらいていく可能性を示されました。

コメンテーターの浅井雅志氏による論点の整理と登壇者への質問をとおして論点がより明確になり、質疑応答が深まることで、3 時間におよぶ有意義なシンポジウムとなりました。

2日目は「今、ロレンスにどうアプローチできるか」と題されたワークショップです。講師が現役の学生たちとともにロレンスのテクストを読むという初の試みでした。高知県立大学の学生さんを中心に、甲南大学、相模女子大学、早稲田大学、関西学院大学から学生さんに参加していただき、たいへん興味深い実践がくりひろげられました。



中林正身氏は『チャタレー夫人の恋人』を、岩井学氏は『虹』を、高村峰生氏は詩「ハミングバード」をテクストにして＜授業＞を展開されました。各グループでのセッションが終わったあと、講師が集まってそれぞれのグループでの実践を振り返り、フロアとの質疑応答をおこないました。ロレンスを長年にわたって研究してきた講師が若い学生たちとともにテクストに向き合うという今回のワークショップは、文学を学ぶ意義と文学研究の可能性をあらためて見出し、共有する貴重な時間となりました。

日曜日にもかかわらず、真剣にロレンスのテクストに対峙し、読みを披露してくれた学生の皆さんに心から感謝を申し上げたいと思います。

来年度の第53回大会は2022年6月18日（土）、19日（日）に高知県立大学で開催予定です。現時点では、対面による実施が可能なのかオンラインとのハイブリッド開催になるのか定かではありませんが、いずれにしても皆さまとの1年後の再会を楽しみにしています。